

小中学生を対象とした地域への愛着醸成を目指す活動 —徳島県佐那河内村における「言葉で風景スケッチワークショップ」を事例として—

真田 純子¹

¹正会員 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 (〒770-8506徳島市南常三島町2-1)
E-mail: sanajun@ce.tokushima-u.ac.jp

近年、中山間地の棚田風景などに価値が認められつつある。その一方で過疎化が進み、そうした一次産業のつくる風景の維持が難しくなっている。また一次産業のつくる風景は生活の姿が風景になっているものであり、単純に空間の操作によって風景をデザインすることは難しい。以上を踏まえ、徳島県佐那河内村において小学校3年生から中学校3年生を対象に「ことばで風景スケッチ」というワークショップを行った。各自が撮影した写真を言葉で描写し最終的に絵はがきに仕上げるものである。本活動は各自の「風景の見かた」をみんなで共有することによって「見かた」をデザインすること、それにより小中学生の地域への愛着を醸成し、将来的に過疎化の進行に歯止めをかけることを目的としている。本研究ではこの活動の目的や方法を整理し課題や意義を考察する。

Key Words : *landscape, attachment, depopulation, postcard*

1. はじめに

近年、中山間地域での過疎化の進行が全国的な問題となっている。本稿でとりあげる「ことばで風景スケッチ」の取り組みは、子供たちの地域への愛着を醸成することで、将来的に過疎化の進行に歯止めをかけることを目的にしたものである。小中学生を対象に、2008年、2009年にかけてワークショップ形式で実施した。

本稿は、本取り組みの目的、方法などの概要を整理し、課題および意義を考察することを目的とする。

2. 「ことばで風景スケッチ」の背景と目的

「ことばで風景スケッチ」ワークショップの具体的な取り組み内容については後述するが、簡単に説明するならば各自が撮影した写真を言葉で描写し最終的に絵はがきに仕上げるものである。その目的は、上に記述したように子供たちの地域への愛着を醸成することである。

ここでは、(1)なぜ愛着を醸成する必要があるのか、(2)愛着の醸成を図る方法としてなぜこの活動を取り上げたのか、の2点について説明する。

(1) 愛着を醸成する必要性

近年、文化財としての重要文化的景観の制度が出来、指定される件数も増えてくるなど、中山間地の棚田風景などに価値が認められつつある。

一方で中山間地では過疎化や高齢化が進み、農業などの一次産業が衰退し、それにとまって一次産業のつくる風景自体も失われつつある。そのため、棚田や段畑などの観を維持するための保全計画やオーナー制などの対策がとられている。

しかし本来、人々の生活を映す生きた景観であるべき「文化的景観」は、そこで営まれる生活があってこそその価値である。こうしたことから、過疎化の進行を抑えることが重要である。

過疎化の進行を抑えるためには、ア) 定住人口の増加に加え、イ) 交流人口増加のためのイベントなどの取り組み、ウ) 働く場所づくりなど、地域を活性化させるための何らかの活動が必要となる。

ア) の定住人口の増加については、まずは流出人口に歯止めをかけることが大切である。進学などでいったんは出て行ったとしても、就職、子育て、退職後などの機会に「やっぱり自分のまちに住みたい」と思えるよう

にしておくことが重要であると考える。

イ) の交流人口増加については、これだけでは過疎化の進行は押さえられないが、来訪者が来ることによって仕事生まれ、雇用機会が増える可能性があること、来訪者が移住する可能性がある点などにおいて、過疎化抑制にとって意味が認められる。

ウ) の働く場所づくりは、六次産業化その他、さまざまな活動が考えられる。

ア) については、子供の頃から自分の生まれ育ったまちの良さを認識しておくことが大切である。またイ) およびウ) の活動を実際に行っている人たちを見ると、その原動力として「自分たちの地域を何とかしたい」という思いが原動力になっていることが多い。

これらのことから、まずは地域のことをよく知り、愛着を持つことが、将来的に「住みたい」と思うこと、「何とかしたい」という活動に結びつくと考えている。

(2) なぜ「言葉で風景スケッチ」か

地域への愛着を持つ方法の一つとして、地域の風景を愛でることが重要であると考えた。しかしながら、中山間地の主体となっている一次産業のつくる風景は、上述したように生活の姿が風景になっているものであり、単純に空間の操作によって風景をデザインすることは難しい。一目見て「良い」と思えるような風景を物理空間として作り出すことには限界がある。

そのため、目には入っていても意識に入ってきていない地域の環境を「風景」として意識してもらうことが、空間の改変無しで「風景」を豊かにすることであると考えた。

3. 「言葉で風景スケッチ」の概要

(1) ワークショップの概要

ワークショップは、2008年と2009年に以下の日時、対象で行った。

- ・2008年 小中学生ワークショップ
日時：2008年6月16日 13:30～15:30
場所：佐那河内小学校
対象：小学校6年生21人、中学校1年生21人
- ・2009年 中学生ワークショップ
日時：2009年11月13日 13:45～15:35
場所：佐那河内中学校
対象：中学校3年生17人
- ・2009年 小学生ワークショップ
日時：2009年12月18日 8:45～10:25
場所：佐那河内小学校
対象：小学校5年生18人、6年生18人
- ・2009年 小学生ワークショップ

日時：2009年12月18日 10:40～12:20

場所：佐那河内小学校

対象：小学校3年生20人、4年生13人

各回、5～6人ずつのグループに分かれ、進行役として徳島大学の学生がテーブルごとに1人ついた。

(2) ワークショップの流れ

ことばで風景スケッチワークショップは、以下の手順で行った。

- ①とばで風景スケッチワークショップの概要を説明し、あらかじめ気に留まった身近な風景を写真に収めてもらった。(1人2～3枚)
- ②ワークショップ当日までに写真をプリントアウトしておき、当日は、各参加者が自分の撮影した写真の中から、描写をする風景を選んだ。
- ③グループでその風景のどこが気になったのか、なぜ写真に撮ろうと思ったのか、どのような思いがあるのかなどを話し合いながら、言葉をつけた。
- ④後日、事務局側が写真に言葉を載せ、絵葉書のような作品にしたのち、参加者に配布、展示した。

WS当日のタイムテーブルは以下の通りである。

5分	挨拶
10分	説明
30分	ことばで風景スケッチ 話し合い
10分	休憩
30分	ことばで風景スケッチ 文章作成
10分	発表
5分	講評・挨拶

最初の説明では、自己紹介がてら、さまざまな風景を紹介した。このとき、風景を細かく説明し、「良く見る」ことや、人が風景を解説すると、一見ただけではわからない風景の面白さがあること、身近な風景にも面白さがあることを分かってもらえるよう配慮した。

また、文章を作成する前に「話し合い」の時間を設けた。これは上記の③にあたるが、話し合いの時間に何が良かったのか、どう思ったのかを話し合うことで「人に伝える」言葉が出てくると考えたためである。



図-1 ワークショップの様子

4. ワークショップの成果

(1) 絵はがき

ワークショップ当日は、A4用紙の上半分に写真を貼るスペース、下半分に文章を書くスペースを設けた台紙を用意し、手書きで文章を作成した。もともとデジタルカメラで撮影したもののため、後日大学生が写真上に文字を入れ、絵はがきに作成した。(図-2,3,4)



図-2 ワークショップの成果 (中学3年生)



図-3 ワークショップの成果 (小学6年生)



図-4 ワークショップの成果 (小学4年生)

(2) 成果の公表

作成した絵はがきは、小学校、中学校に譲渡したほか、A1～A3サイズのパネルを作成し、以下の会場で展示を行った。

- ・2008年11月9日：
村内の天一神社で行われたお祭り (図-5)
- ・2008年11月21日
佐那河内で開催された徳島大学タウンミーティング
- ・2010年1月17日
佐那河内ふれあい祭り (於：中学校体育館)
主に地元の方たちに見ていただいた。また、その場で気に入った絵葉書を印刷して持って帰ってもらうサービスも実施したが、数多くの方が印刷を希望された。



図-5 お祭りでの展示風景

5. ワークショップの意義と課題

実際にワークショップをやってみて、小学生、中学生の地域への愛着の醸成が出来たかどうかは分からない。しかしながら、カメラをもって外に出ること、撮影した写真をもとに話し合いをすることで自分の地域の風景を言葉にすること、友達が風景をどのように見ているかを知ることで自分の風景の見かたも広がること、など、様々な意義が期待される。

また、展示会場では地域の大人たちから「改めて写真で見ると良い風景だな」「子供たちはこんな風に見ているのか」等の感想が聞かれ、大人たちが自分たちの地域を改めて感じるきっかけにもなったと考えられる。

ワークショップ開催における課題としては、以下の点が挙げられる。

- ・デジタルカメラは、クラスで回し使いたため、1人あたりが所持できる日数が限られていた。そのため、本当に気に入る風景を撮影できていない子供たちもいた。
- ・授業時間を2コマ分使用したが、話し合いの時間に言葉を引き出し、文章を考える作業には時間が短かく、最後にはせかさながら書く子供たちもいた。